



同校キャンパスと  
学内最大のイベント、  
サマーファッションコンテスト

# 就職指導への熱い思いが 学生を励まし、動かす

## 香蘭ファッションデザイン専門学校 (福岡市中央区)

創立以来78年。同校はその長い歴史の中で、一貫して洋服づくりの基本技能の習得に力を入れてきた。流行は、確かな技能に支えられるとの確信からだ。そのため現在も、実技実習に多くの時間を当てている。一方で、2年前から秘書検定指導を開始し、今年は早くも1級・準1級合格者を出すなど目覚ましい成果を挙げている。その狙いと指導法についてお話を伺った。



### ファッション界を支える 地道なもののづくりの現場

同校は昭和10年、日本女性の多くがまだ和服を着ていた時代に洋裁学校としてスタートした。当時、洋装でさっそうと街中を闊歩する女性<sup>かつぽ</sup>は、新しい時代のシンボルとして注目を集め、若い女性の憧れの的であった。そんな時代に洋裁学校で学ぼうとする女性たちもまた、進取の気風のある活発な人が多かったようだ。

以来78年。同校はファッション界の各分野に多くの人材を輩出し、確かな地歩を築いてきた。卒業生の一人である岩本美津子学校長は、同校の気風についてこう話す。

「卒業生は3万人余り。2年に一度開かれる同窓会には20代から80代まで幅広い年齢層の方が集まり、それはにぎやかです。本校にとつて卒業生のネットワークはかけがえのない財産であり、大きな力となっています。長い歴史の中で、社会のニーズに合わせて、さまざまな変化を遂げてきましたが、ファッションの原点といえる服づくりの基本技能の習得には一貫してこだわってきました。

デザイナーやパタンナーなど直接制作に携わる人はもちろん、販売や企画を希望する人も含め、1年次に全員が服づくりに取り組むのも、そうしたこだわりからです。この授業ではデザインからパターン作成、素材選びや縫製と、洋服が出来上がるまでの一連の流れを体験します。一見華やかに見えるファッション界ですが、実際には地道なもののづくりの現場です。基本をしっかりとし身に付けた、信頼される人材を送り出したいと願っています」。

それには人間性の醸成も欠かせない、と岩本学校長は強調する。ファッションの現場は、多くの人々の協働により成り立っている。そこでは当然のことながら、人間性が大きく関わってくる。共に働く人々から愛され、信頼されることが結果的に良い仕事につながっていく。そのことを授業の折々、実習作業の折々、学生たちに伝えてきた。「学生は『また道德の時間が始まった』と笑いますが、繰り返し伝えることが大事だと思っています」と岩本学校長。

技能を教え伝える中で、職業人としての意識を育み、自覚を促していく。専門職育成を担う専門学校だからできることだろう。こうして独自の人間形成に努めてきた同校だが、ここ数年は新たな取り組みを開始している。

事務局職員が中心となり、就職面接指導に力を入れるとともに、秘書検定も導入し、大きな成果を挙げている。ファッション分野の人材育成に秘書検定がどう活用されているのか、担当



岩本美津子校長



古後芳恵さん(右)と落石奈緒子さん



事務局職員の  
徳丸智子さん

者の方々にお話を伺った。

## 指導力を身に付けるため、 職員自らが学ぶ

事務局職員が就職面接指導に乗り出した背景には、就職状況の変化がある。かつてファッション業界は、服飾専門学校生を中心に採用を行ってきたが、近年は四年制大学生の志願者が急増している。そのため就職試験の場においても、四大生と競合する場面が増えてきた。

「2年生と4年生では年齢的にも2歳の差があります。専門技能では決して負けてはいませんが、四大生に比べ、社会経験の乏しさが弱点になってしまいうケースが出てきました。面接の面で、学生が気後れしてしまうのです。そこを何とかフォローしていかないと」。就職を担当している古後芳恵さんは切迫した思いに駆られていたという。そんなとき、一つのきっかけが生じた。

3年前のこと。学生の内定先から入社までに秘書検定2級を取得させるように要請を受けたのだ。しかし、それまで同校とは縁のなかった検定だったため、当時、学内では指導できる教員がいなかった。そこで頼りにされたのが、事務局で経理を担当している徳丸智子さんだった。系列短大の秘書科出身で、卒業後も秘書科助手として秘書教育に携わったキャリアは、その課題に因應するのにふさわしかった。徳丸さんはこう振り返る。

「当時、学生指導には全く関わっていませんでしたが、できる者がやればいいと喜んで引き受けました」とほほえむ。

徳丸さんには、秘書教育はこれまでの人生を大きく支えてくれたとの思いが強く、指導にも熱が入った。それを傍らで見ていた古後さんは、大きく心を動かされたと話す。

「私はもともと被服を学び、卒業後、学校業務に携わることになりました。就職を担当するようになってからは特に、自らの社会経験の乏しさを痛感し、もともとと勉強が必要だと感じていました。そんなときに徳丸さんの指導ぶりに接し、その真摯さに圧倒されました。日ごろから態度・振る舞い、相手に対する気配りなど、何かにつけて徳丸さんをお手本にしてみました。その基本にあるのが秘書教育だと知り、自分もぜひ学んでみたいと思ったのです。それでご指導を請いました」。

職場の先輩・後輩の間に立場を超えて心の通い合いが生まれた瞬間だった。徳丸さんが真っ先に勧めたのは、秘書検定の最上位級へのチャレンジだった。準1級、1級へのチャレンジそのものが、多くの気付きや学びに通じるとの思いからである。その手立ての一つとして、徳丸さんの恩師である中村健壽教授（川崎医療福祉大学・岡山県）が指導する秘書検定サークルへの参加を勧めた。同サークルは秘書検定の最上位級を目指し、学生たちが切磋琢磨する場であり、同じ目標のもと、着実にひたむきに学ぶ仲





スーツから私服に着替え、  
放課後の自主制作に取り組む



2級合格者と  
それに続く学生たち



1級・準1級合格者(前列)  
田中あゆみ、(後列右から)  
井星明子、宮本真帆、江  
崎実澤の皆さん

## 職員の前向きな姿勢が 学生を励まし、動かす

こうして1年半の間に、秘書検定準1級・1

間があることを知ってほしいと思ったからだ。

「サークルの皆さんは頭の前からつま先まで神経がゆき届き、びしっとしているのが最初は大倒されました。他の人を見ることで自分に不足している点も見えてくるし、目指すレベルも具体的にイメージできるようになりました。独習では得られない刺激でした」と古後さん。

級を取得し、その勢いでサービステュート検定1級にもチャレンジし、見事合格を果たした。そして今、就職バックアップの一環として、放課後に希望者を対象に「就職模擬面接」(一人1時間)を行っている。担当するのは、古後さんと

もう一人、学生課担当の落石奈緒子さんだ。ひたむきに目標に向かう古後さんと身近に接し、落石さんは大きな刺激を受けたと言う。「自らが率先して学ぶことの大切さを強く感じました。古後さんが行くなら私も、と岡山の秘書検定サークルにも参加。準1級を取得しましたが、1級にはまだ手が届きません。学生のお手本となるような自分を目指し、日々努力していきたいと思っています」。

もちろん徳丸さんも協力を惜しまない。就職模擬面接は学生の口コミも手伝い、今では多くの学生に支持され、すっかり定着している。アンケートからその一端を紹介したい。「模擬面接を受講し、自分が人からどう見られているかをあらためて考えさせられました。指摘された点を意識するだけで、自分でも分かるくらい印象が変わったように感じました」。

「模擬面接がこんなに楽しいものとは思っていませんでした。『あなたの明るさと爽やかさ、その笑顔があればどこでも受かる』と言われたのが本当にうれしかったです」。

中には「自分のことをこんなに親身になって考えてくれる人がいるなんて、自分は本当に恵まれている」と感激を伝える声も。

担当者の方々が、学生たちにいかに真摯に向き合っているか。アンケートにつづられた感謝の言葉から伝わってくる。

もう一つの新たな取り組みが秘書検定講座である。検定が行われる春秋の2回、毎週月曜の放課後に1時間ずつ、計8回実施される。すでに昨春秋には1級1名、準1級4名の合格者を出すなど、予想以上の好成績を挙げている。

1級に合格した田中あゆみさんはこう話す。「人から見た自分を意識するようになったのが大きな成果でした。自分ではやっていないつもりでも、人から見たら全然できていないことが多いんだなと。合格に向けては、指導していただいたことが完全に自分のものになるまで繰り返して学びました。ここがポイントだったかと思えます。手先の動作など、細かな動きについても古後先生がお手本を示してくださいだったので、イメージしやすかったです。1級まで頑張れたのは、多くの方々のサポートがあったおかげ。支えてくださった方々に感謝しています」。

田中さんの1級合格は後輩たちに大きな刺激となる。準1級へのチャレンジに弾みがつき、4人の合格者を生み出した。徳丸さんから古後さん、古後さんから落石さん、そこから田中さんはじめ多くの学生たちにバトンがタッチされ、実りを生み出している。この好循環の中から、服づくりの基本技能と合わせ、社会人としての常識マナーもしっかりと身に付けた学生たちがさらに育っていくに違いない。